

---

# 穴

小坂戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

穴

### 【Zコード】

N1447F

### 【作者名】

小坂戒

### 【あらすじ】

空想科学祭、出展第一作品です。

土の掘られる音がぐぐもつて聞こえてくる。

まだ、耳だけは犯されていないはずなので単純に此処の土の質なのだろう。

ショベルが差し込まれるたびに厚い空氣の層にでもぶつかってしまつた様な抵抗も感じる。

100年近くも経つてしまえば、もう預かる事さえも、この土地の存在価値さえも忘れてしまつたのだろうか。

「悪いね、君もまだ休んでいたかつたださう。でも、私一人ではどうも荷が勝ちすぎているようですね

共に穴を掘る間柄、といつても見知つて間のない関係ではある。直ぐに別れてしまつにしても今は穴を掘るところ同じ目的で動いている。

だから、名前だけは聞いておこいつと思ったのだが、彼はどうも頑固だ。

何度も聞いたところで、伝える必要がない、そうとしか返してこない。ただ、掘るだけでは彼はそうでもないようだが、私は飽きてしまう。その為の会話の糸口だったのだが、あまりにあっさりと潰されてしまつた。

「ぱりぱり無言で掘つてこむと土の感触と音が変わつてするのが分かった。

「固さが変わつてきた。さりとてショベルだとどういね。機械か何かは無いかい

彼は何の反応も示さない。

少し、腹立たしくなつたが考えればこれは彼なりの意思表示なのがもしそれない。

否定する時は何の反応も示さない、考えるほど効率の良い動き方をするのだなと感心してきた。

「質問を変えるけれど、君は話せるのかね」「彼は首肯するが、そこにさらに付け加える。

「出来れば言葉で答えてくれるといい」「初めて彼の口が開く。

「話せます」

彼の声は思つっていたよりも低いものだった。

私は勝手に高音に近い声だと思つてい込んでいたのだ。

実際の彼の声は中音域程度の聞きやすいものであった。

「仕方ないから、これで掘るとするよ。でも、退屈を妨げるくらいは協力してくれるね」

短く、はい、と応えられる。

「君の仲間はみんな居なくなつてしまつたけど、どうして君は律儀にこんな所に残つてるのかな」「

「ここに居る事。此処に来た人の手伝いをする事。どちらも私の仕事ですので」

「最近のにはない、律儀さだ。他のも見習えれば良かつたのに」返事は無い。

そもそも返事が返つてくるような文ではなかつた。

さらに掘り進めるのがしぶしぶなってきた。

土が非常に固いためにショベルの先が削れしてきたのだ。

「土のかからない場所へ移動してください」

しばらく離れていた彼が近くに来るなりそう言つので大人しく従う。彼は削岩機のようなものを抱え、地面に当てるなりスイッチを入れた。

すると、轟音が起こり、土ぼこりの為に目が開けられなくなつたの

で思わず後ろすさりをしながら田を瞑る。

そのせいで細かくはわからなかつたが、音だけで判断するに彼は5回ほど土を削つたようだ。

実際に目を開くと固かつた部分が多少、削られていた。

それからは土ぼこりのせいか、会話が途切れてしまつ事になつた。

「ねえ、君は少し前の騒ぎをひとつ語つ

応えない、つまり知らないという事。

だけど、彼なりに悪いと思つたのかリップサービスが入る。

「私は自分の仕事を行うだけです」

彼の考えがとても素晴らしいときもある。

でも、そう思い込んでしまうからこそ災厄もある。

それが少し前に起つたのだから何とはなしに因果を感じざるを得ない。

「そうだね。本当にただ純粋に皆がそう思えたなら幸せだったのかもしれないね。それと、この穴が掘れたら君にお願いがあるんだ」

「何でしょう

私は少しだけ考えるそぶりをしてから、応える

「この穴が掘れてからお願ひするよ」

穴はもう少しで出来上がる。

私はもう一つの目的の為に穴掘りは彼に任せて休養をとつていた。彼の鳴らす音を聞きながらまどろんでしまう手前で声がかかる。ついに掘れたのだ、と。

「では、お願ひするよ。私をこの穴に埋めてくれて欲しい。勿論棺桶なんて要らないからね」

彼は怪訝そうな顔をする。

「生きたまま入れてくれと言つてゐるんじゃない。君はお願ひを聞いてくれればいい

口の中で、じゃあね、と付け加える。

ゆっくりと立ち上がり、近くの地面に刺してたショベルを抜き、上向きに置く。

そして、金具部分を握るよつて首ijoと振り下ろし、下からも突き上げる。

一度ではない、一度、三度。

突き上げるたびに皮膚が裂けて血が飛び散る。

まだ、大きな血管には届かない。

さらに勢いをつけて四度目をしようと手前で倒れここんでしまう。意識だけはまだあるので苦しいが間も無く消えてしまうのはなんとなく分かる。

彼はちゃんと埋めてくれるだろつか。

そんな疑問が湧き出てくるも簡単に打ち消される。

彼を作った人間を、そして彼のプログラムを誰よりも私は知つているのだから。

何も問題は無い。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1447f/>

---

穴

2010年10月9日19時35分発行